

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：82201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00166

研究課題名（和文）内間安セイ・俊子と戦後の日米美術交流に関する研究

研究課題名（英文）Ansei Uchima and Toshiko Uchima, an art exchange between Japan and USA in the post-war period

研究代表者

木村 理恵子（Kimura, Rieko）

栃木県立美術館・学芸課・特別研究員

研究者番号：10370868

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、内間安セイと俊子を中心とした、日米の美術家たちの国際交流から戦後の日本版画史ならびに日本美術史の一側面を明らかにする試みであった。が、長期化したコロナ禍の直接的および間接的な影響により渡米しての調査が出来なくなり、国内での調査を進めた。その結果、内間夫妻以外にも国際的な美術の交流に寄与していた美術家たちが少なくないことと、その具体的な交友関係の一端が見えてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1950年代から60年代にかけて、欧米での日本版画ブームを契機として国際的な展覧会が多く開かれるようになり、版画家たちが人気を博していった。それは日本における美術史的な展開にも大きな影響を及ぼしている。草創期の公立美術館の所蔵作品の内訳として版画が最も多く含まれていたことは、この時代にこうした美術の国際交流があったことと、その中心となった版画の重要性が増したことによって裏付けられる。

日本における1960年代から70年代にかけての美術領域の発展には、アメリカとの交流が一定の役割を担っていたと考えられる。それは、版画の隆盛だけでなく、美術マーケットの成立など、美術界の様々な動向に寄与していた。

研究成果の概要（英文）：This study is an attempt to clarify one aspect of postwar Japanese art history through international exchange between Japanese and American artists.

研究分野：芸術学

キーワード：日本近代美術史 日本近代版画

## 1. 研究開始当初の背景

1950年代から60年代にかけて、欧米での日本版画ブームを一つの契機として国際的な展覧会が多く開かれるようになり、棟方志功や斎藤清などといった版画家たちが人気を博していった。それは日本における美術史的な展開にも大きな影響を及ぼしている。たとえば、1972年に開館した栃木県立美術館を例にとれば、久保貞次郎をはじめとする美術評論家らの助言を受けながら設立の準備を進めていったこと、その所蔵作品の内訳として版画が最も多く含まれていたことは、この時代に、こうした美術の国際交流と、その中心となった版画の重要性が増したことを裏付けるものである。さらには、栃木県立美術館の版画コレクションの中には、内間安理の作品《IN BLUE (DAI)》(1976年)、《LIGHT ECHO》(1977年)の2点も含まれ、いずれも開館まもなくの頃に収集されていることは興味深い事実である。

第二次世界大戦終結後、アメリカの国家政策を背景として、日米の文化交流が盛んにおこなわれるようになった。美術の分野も例外ではない。駐留軍として日本に滞在したアメリカの軍属やその関係者たちによる、版画を中心とした日本美術への興味・関心の拡大と、多くの日本人美術家たちのアメリカ留学やアメリカ滞在によって、密な交流が生まれた。

日本における1960年代から70年代にかけての美術領域の発展には、アメリカとの交流や関係が一定の役割を担っていたと考えられる。それは、版画の隆盛だけでなく、美術マーケットの成立などにも寄与していた。

## 2. 研究の目的

本研究は、内間安理(1921-2000)と内間俊子(旧姓：青原、1918-2000)というアーティスト夫妻の活動と、彼らを中心とした戦後アメリカにおける日本人美術家たちの交流を考察することで、戦後の日本美術史の、これまであまり研究されてこなかった一側面を明らかにすることを目的としていた。

内間安理と俊子は、1959年以降の活動拠点をアメリカ、とりわけニューヨークに移し、日本の美術団体や画壇からは一線を画すことになったため、日本の美術史の文脈では語られる機会が少なくなってしまう、展覧会などで取り上げられる機会も限定的であった。また、彼らが、オリヴァー・スタットラーらアメリカ人による日本版画コレクションに果たした役割は一部では知られていたものの、それを契機として日本の美術家たちとの関係が持続され、戦後アメリカの対日本の親米文化政策プログラム等によって渡米した日本人美術家たちともアメリカで盛んに交友したことなどは、あまり知られていない。

本研究は、こうした個別の例を取り上げることで、戦後の美術史の一側面を、国際交流という視点から明らかにすることを目的としている。

## 3. 研究の方法

研究開始当初は、ニューヨークに住む内間安理と俊子夫妻の遺族を訪問し、そこに残された作品の調査はもちろんのこと、書簡類や写真をはじめとする資料や、交流した他の美術家たちの作品を丹念に調査することで、戦後の日米美術交流の一端を明らかにすることを目指した。しかし、コロナ禍の拡大と長期化の影響によって、結果的に渡米しての調査は困難になってしまったため、日本国内での調査に終始することとなった。その結果、国内には少ない内間安理と俊子の資料よりも、その周辺の美術家たちの資料を中心に調査することになったことを断っておく。

一方で、こうした欧米との関係だけではなく、旧共産主義諸国と関係や交流を深めた、もう一つの戦後日本の版画についても広く調査を進めることになった。こちらは、いわゆる「創作版画」とは異なり、社会的なメッセージ性が濃厚なリアリズムの版画群で、「版画運動」という一つの社会運動として大きなうねりを創出したものである。1960年代から70年代にかけて顕在化した社会問題への抗議の表現の一つであったが、そうした意見表明や運動の表現メディアとして、版画が大きな役割を果たしていた。

この二つの潮流は、同じ版画の動向とはいえ、全く異なる表現と背景を持っている。しかし、いずれも、期せずして同時期の現象で、かつ国際的な広がりを持っていたという共通点があり、大きな視野に立った研究も有効ではないかと考えている。しかし、その詳細な検証は今後の課題としたい。

## 4. 研究成果

本研究は、内間安理と俊子を中心とした、日米の美術家たちの国際交流から戦後の日本版画史ならびに日本美術史の一側面を明らかにする試みであった。が、記述の通り、長期化したコロナ禍の直接的および間接的な影響により渡米しての調査が出来なくなり、国内での調査を進めた結果、内間夫妻以外にも国際的な美術の交流に寄与していた美術家たちが少なくないことと、その具体的な交友関係の一端が見えてきた。

たとえば、いくつか例を挙げるならば、まず猪熊弦一郎がいる。1955年に再びパリへ渡るつもりでニューヨークに寄った猪熊は、最先端の芸術の拠点の一つだったこの街に魅了され、その

まま 20 年間にわたり同地で活動する。その人柄もあって、猪熊邸はサロンのように芸術家や文化人たちの交流の場となった。イサム・ノグチなどの美術家だけでなく、内間夫妻とも家族ぐるみで親しく交流していたことが、残された写真などからも跡付けられた。

秋田を拠点に活躍した勝平得之は、戦時下に一時、日本に滞在したドイツ人建築家ブルーノ・タウトと交流したことや、藤田嗣治が国策映画「現代日本」製作の取材に訪れた際に秋田を案内したことなどが知られている。そして、戦後においても秋田における国際的な交流の拠点となっていた。オリバー・スタットラー著『よみがえった芸術 日本の現代版画』の中で紹介されている版画家でもあり、その通訳として取材に同行した内間安理との間で書簡の往復もあった。

藤田嗣治との交流がきっかけとなって、日本の美術家や文化人たちとも親交を深めたアメリカ人フランク・シャーマンは、帰国後も猪熊弦一郎らをはじめとする多くの日本人美術家たちとつながりを持っていた。

こうした個々の国際交流と、内間夫妻の人間関係の特徴およびその画業を明らかにすることが本研究の目的であった。既述のとおり、内間夫妻についての研究は十分には果たせなかったが、その同時代の周辺の美術家たちの国際交流の様子を具体的に知ることができたのは、本研究の成果であった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村理恵子	4. 巻 なし
2. 論文標題 創造への旅路 小口一郎の生涯と芸術	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 展覧会図録 『「二つの栃木」の架け橋 小口一郎展 足尾鉍毒事件を描く』	6. 最初と最後の頁 8-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村理恵子	4. 巻 なし
2. 論文標題 躍る身体を描く 内田あぐりのドローイング	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 展覧会図録 『ながれ 内田あぐり』	6. 最初と最後の頁 42-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村理恵子	4. 巻 1
2. 論文標題 オスカー・シュレンマーの「三つ組のバレエ」とパウハウス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『きたれ、パウハウス展』図録	6. 最初と最後の頁 156-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村理恵子	4. 巻 1
2. 論文標題 山田耕筈と美術 出発点としてのベルリン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『山田耕筈と美術』展図録	6. 最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村理恵子
2. 発表標題 「山田耕筰と美術」展をふりかえって
3. 学会等名 明治美術学会 第3回例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------